◎研究会活動報告◎

外国文化研究会　2021年度活動報告

八　幡　雅　彦

外国文化研究会の近年の動向

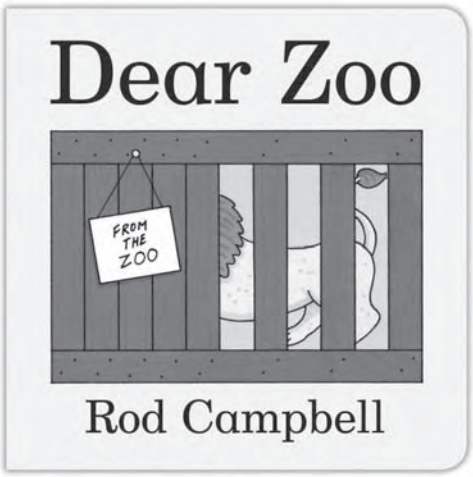
私が初等教育科に異動した2015年、外国文化研究会は１年部員４名でスタートした。翌2016年には７名の１年生が加わり11名となった。そして、それまでは保育園や幼稚園を訪れて行う公演はすべて私が発案し指導していたが、この年からは学生たちが主体的にやれるようになった。2017年度の新１年生は５名でこの年の部員数は12名だったが、2018年度には一挙に９名の１年生が加わり部員数は14名となった。それに伴って活動はさらに活発化し、５月から令和元年となる2019年度には、はじめて２ケタとなる10名の１年生が加わり、部員数は19名までに増えた。ここまで部員数は４→11→12→14→19と右肩上がりに増えてきたが、2020年、コロナウイルスの襲来により研究会活動は停止となり、４月の研究会紹介ができなくなり、ついに新入部員はゼロとなった。残った２年生だけで短大ウィンターフェスティバルに出演する予定だったが、これもコロナウイルスのため中止に追い込まれ、2020年は、学生たちは何ひとつ公演ができず気の毒な思いをさせた。しかし学生たちは、１年の時に、外国文化研究会でがんばった経験を活かし、小学校教員採用試験に現役合格した者もいれば、専攻科に進学しさらに学びを深めている者もいる。

2021年に入ってもコロナウイルスは収まる気配がなく外国文化研究会存続の危機に見舞われたが、なんとか４月の研究会紹介は実施することができ、２名の新入生が入ってきた。

活動の模索－大型英語絵本の読み聞かせ－

これまで外国文化研究会は保育園や幼稚園を訪れ英語の歌やゲーム、英語絵本の読み聞かせを行ってきた。しかし2021年は部員が２人のみで、しかもコロナウイルスのため歌やゲームができない。そこでふたりと話し合いをしながらやるべき活動を模索した結果、英語絵本の読み聞かせを集中的に行うことにした。そして私が所有しているもののうちから、次の４冊の大型英語絵本を用いた。

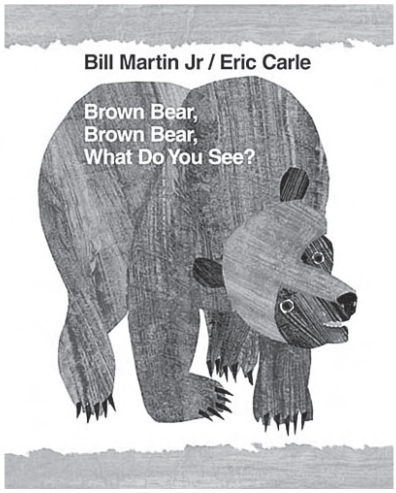
○Rod Campbell, *Dear Zoo*



ロッド・キャンベル『どうぶつえんへのおてがみ』。 ひとりの男の子が動物園にペットを送ってほしいと手紙を書く。すると動物園は象、きりん、ライオン等の動物を次々と送ってくる。それに対して男の子は「大き過ぎる」「背が高過ぎる」「狂暴過ぎる」等の理由を付けて送り返す。彼が最後に満足して飼うことに決めた動物は何か。檻や籠から動物たちが飛び出す仕掛

け絵本で、子どもたちには動物たちを徐々に見せ予想させながら、それらの動物は英語で何と言うかを答えてもらった。

○Bill Martin Jr and Eric Carle, *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*



ビル・マーティン・ジュニア＆エリック・カール『くまさん くまさん なにみてるの？』

茶色い熊が見ている動物は何か。そしてその動物が見ている生き物は何か。ページを徐々にめくっていきながら子どもたちに予想させ、それらの生き物を英語で答えてもらった。

○Bill Martin Jr and Eric Carle, *Baby Bear, Baby Bear, What Do You See?*

ビル・マーティン・ジュニア＆エリック・カール『あかちゃんくまさん あかちゃんくまさん なにみてるの？』 前作の姉妹編である。赤ちゃん熊が見る動物は何か。そしてその動物が見る動物は何か。この絵本にはモモンガ、鷺、プレーリードッグのような子どもたちにはなじみの薄い動物たちが登場する。

○Paul Galdone, *The Little Red Hen*

ポール・ゴールドン『ちいさなあかいめんどり』 昔、猫と犬とねずみと小さな赤いめんどりが心地の良い小さな家に住んでいた。猫と犬とねずみは怠け者で、すべての仕事をめんどりに押し付けていた。めんどりがひとりで苦労しておいしいケーキを作った後に訪れた結末は。英語を日本語に訳しながら読んだ。

公演を通しての学生たちの成長

１番最初の公演は、コロナウイルス第４波が終息に向かいつつある６月30日（水）、別大附属幼稚園においてだった。感染防止のためテントを張って戸外での読み聞かせとなった。私は外国の保育施設で先生が砂場で園児たちに読み聞かせをしていたのを思い出し、感染症などがない普段の時でも園児たちはのびのびとした気持ちで聞けて良いのではないかと感じた。用いたのは*Dear Zoo*と*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*で、英語を知っている園児が多いのには驚いた。事実、ひとりの学生は「園

児が、その動物を英語で言えるよ！と言って英語で答えてくれたり、中にはその絵本の英文を全部読めたりと驚かされることばかりで、タジタジでした」と述べ、もうひとりの学生は「英語に少しでも触れてもらうつもりで読み聞かせに行ったのに、たくさんの英語を知っていて、教えることがないなと感じた。発音も読み方もあっていて、どんどん園児の口から英語があふれ出してくるのを聞いて驚きが隠せなかった」と述べた。英語教育が小さな子どもたちの間にも浸透していることを実感した公演だった。

６月30日、別大附属幼稚園での読み聞かせ

第２回目の公演は、コロナウイルス第４波がほぼ終息した７月23日、日出町大神地区公民館「夏休み子ども教室」での読み聞かせだった。今回は小学生も加わることもあって、*Dear Zoo*と、もうひとつはレベルが１段階高い*Baby Bear, Baby Bear, What Do You See?*を用いた。練習に当たって、“flying squirrel”（モモンガ）、“heron”（鷺）、“rattle snake”（ガラガラヘビ）等、学生たちが初めて接する英語が登場し、案の定、ひとりの学生は、「前回よりも少し難易度の高い動物が出てくる絵本は自分たちもよく知らない動物がいて英語の発音も結構苦戦しました。そのためまず口を大きくあけてはっきり言おうと思い練習しました。本番は少し口が回らなくなりそうになることがあったのでもっと大きくあけて読むと口もしっかり回ってはっきりゆっくり聞こえるのかなと思いました」と述べた。そしてもうひとりの学生は、「幼稚園生のような元気な声はたくさん聞くことはできませんでしたが、気持ちよく読み聞かせをすることができました。挙手をして答えを言ってくれるところにかわいさを感じました。小学校低学年となると恥ずかしさも出てくるのか、なかなか自由に言ってくれる子は少なかったですが、前回とは違いまた一つ新しい感覚を味わうことができました。保護者の方やテレビ局が入ることに驚き、緊張しましたが、読み始めると緊張も少しほぐれちょうどいいくらいの緊張感で読むことができました」と感想を述べた。

７月23日、日出町大神地区公民館
「夏休み子ども教室での読み聞かせ

その後、コロナウイルスの第５波を経て10月に活動を再開し、11月27日（月）の大分市ココカラりんく、12月１日の短大フェスティバルに向けての練習を始めた。今度はもう１段階レベルを上げ、*The Little Red Hen*を選んだところ練習から苦戦が続いた。英語がなかなか正しく発音できない。感情を出すことができない。刻一刻と公演の日が迫ってきて、焦った私は、読み方の模範を動画に収録し学生たちに送って自宅でも練習させた。すると、驚いたことに、学生たちは短時間で見事に修正し、11月27日の本番を迎えた。学生たちは20名余りの幼児・児童の前で自信をもって読み、代表の小学生から「絵本が面白かった」と言ってもらえた。

11月27日、ココカラりんくでの読み聞かせ

この後、短大フェスティバル、12月23日の「劇団立見席プロデュースおんせん演劇祭 in ビーコンプラザ」も無事にこなし、私も１年を通して学生たちの成長に接することができた。次の学生たちの振り返りからは、新たな挑戦への決意が感じられる。

学生たちの振り返り

〇石橋未宥（１年Bクラス）

別大附属幼稚園での読み聞かせは、大学に入って初めて子どもに触れ合う機会でした。入って３か月程度の浅い知識で、どうなるのか未知数で期待と不安が入り混じっていましたが、いざ子どもたちと会って絵本を読んでみると子どもたちの元気さに救われてとても楽しい経験となりました。英語についても楽しんで連呼してくれていて英語の絵本を読んだ甲斐がありました。日出の公演では幼稚園とはまた違う子どもたちが読み聞かせを聞いてくれました。１回経験しているから大丈夫だろうと思っていましたが幼稚園と同じような緊張感がありました。しかし１回目、２回目、３回目とやっていくうちに子どもたちとどう関わりながら絵本を読むのか、少しずつ要領を得てきたのかなとは思っています。しかし、やはりストーリーの絵本となると、理解できているのか、飽きていないかな、楽しめているのかなと分からなくなる時があります。そこをもっと楽しんでもらえるような工夫をしていきたいなとは思います。英語に親しんでもらうという一番の目的を達成するにはまだまだ努力が必要だなと思っています。来年度からやってみたいなと思っているのは子どもたちが知っている手遊びの英語版です。導入部分でも英語に親しんでもらうためには歌や手遊びもいいのかなと思いました。

〇佐藤秋那（１年Bクラス）

１年間の活動を通して、英文を子どもたちにもわかりやすく日本語に戻すことの大変さや難しさを学びました。また、人によって言葉の選び方が違うことを実感しました。２人と先生との活動でしたが、その中でも「こんな訳し方があるんだ」と感じる場面がありました。特に、英文と日本語の読みを交代したときに、日本語の選び方の違いが分かりました。他にも、子ども向けの絵本を読む中で、「あ、この単語知らないな」と自分の語彙の乏しさを思い知らされる瞬間がありました。逆に「文脈からしてこんな意味かな」という予想が当たる瞬間もありました。これからは、英語の授業や研究会以外に英語に触れ合う時間を作れるようにしたいです。１年間、辞書にお世話になることが多かったので、今まで出てきた単語を忘れないようにしたり、新たな単語を自分のものにしたりできるように努力したいです。また、今までは英語の絵本を日本語にして読むことがメインだったので、逆に日本語の絵本を英語にして読むという活動もしてみたいなと思いました。時間もかかり、難しく思う瞬間もたくさんある気はしますが、簡単な英語に変換していくだけでも、自分の力になるのではないかなと思いました。また、話すための力もつくのではないかなと感じました。